

し。海手の方に至りては、砂地多し。氣候へ大坂辺より少し暖なる方也。

○蒔旬ハ八十八夜十日を過ぎて蒔也。

○苞反に種子壹貫貳三百目を水に浸しぬらして、薬灰にまぶし、麦作したるうねの兩脇へ筋をひき、蒔て又灰を置、左右の側をけづりて土をかけ、其上をかるく踏付、其上に人糞に水を和してかけ、一兩日過ぎて亦兩側をけづり、土を寄る。

○扱真葉出てよき程に間引、麦を刈て後株を起し、双方のへりを万のふ小畝なりにてけづり、綿の本へよするなり。

○一尺の間に三所づゝ棒にて穴をつきあげ、少しづゝ油粕を入、土を覆ひ、綿木五寸位に成たる時、五尺の間に拾本程づゝ立おくやうに間引て、木揃へいたし、中打をして、其土を右油粕置たる穴へかけるなり。

○扱暫して中へ筋を堀、人糞を施す和泉にてハクマン

候は大阪付近より少し暖かな方である。

○蒔き時期は、八十八夜を十日過ぎて蒔く。

○一反に種を一貫二、三百目、それを水に浸しぬらして、薬灰にまぶし、麦作をした畦の兩脇へ筋を引き種を蒔いて灰を置き、左右の側を削って土をかける。その上を軽く踏みつけ、その上から人糞に水を加えたものをかけ、一、二日を過ぎてまた兩側を削って土を寄せる。

○さて心葉(第一本葉)が出たら適度に間引き、麦を刈った後に株を起し、両方のへりを万のう(草けづりの小畝)で削り綿の根元へ寄せ

○一尺の間に三か所ずつ棒で穴をあげ、少しづつ油粕を入れて土をかける。綿木が五寸くらいに成長したとき、五尺の間に十本ほどずつ残して間引き、しかも木をそろえて中打ちをし、その土を右の油粕を入れた穴へかける。

○さてしばらくして中へ筋を堀り、人糞をかける(和泉ではクマンと

と。

○又油粕にても干鰯にても入る。是を送り肥と云油粕の方紙の皮。

○扱兩側をけづり土を揚る事、凡三四度、晴雨によりて考へ五六度もする也。○土用に入て木の先の芽を留る也。夫より草有れば引捨く、とかく草をよくとる也。○初花落て終寄とて、又兩側をけづり、土を揚る也。

右ハ大体諸國の作り方に同じければ、其見合の要とすべき事のミをあらまし記す也。

(1) 和泉國 現大阪府の一部。(2) 真葉 心葉とも替く、第一本葉。

大和の国綿の作り方

宇智郡ハ吉野川の流あり。四方ハ山にて、氣候ハ京都より少し寒く、同じ國中にても、奈良・小泉・俵本・御所・新所の間ハ打ちらきて、京都位の氣候也。爰ニ記すハ宇智郡の作り方也。

と。

○また油粕か干鰯を入れる。これを「送り肥」といふ(油粕の方が、実の皮が薄くやわらかである)。○さて兩側を削り土をあげるのは三四度、天候によつては五、六度ほどする。○土用に入つて木の先の芽を止める。それから草が生えていたら、引き捨て、それを反撥してとにかく草を熱心に取るのである。○初花が落ちれば「終わり寄せ」といって、また兩側を削り土をかける。

右は多くの國のつくり方と同じであるから、比較検討の要点のみをあらまし記述した。

大和国でのつくり方

宇智郡には吉野川が流れている。四方は山で、氣候は京都よりも少し寒い。同じ國中(奈良盆地内を指す)でも、奈良・小泉・俵本・御所・新所の間は平坦部で、京都くらいに氣候である。ここに記述するのは宇智郡のつくり方である。

○蒔旬ハ、田に作にハ八十八夜四日巳前よりまきはじめ、八十八夜四日おくられても蒔なり。畑ハ八十八夜より四五日おくられて蒔なり。

○種子ハ尙貫式百目位、見合蒔也。

○肥シハめぐら粕と唱へ、蒔て芽の出ざる内に、油粕を粉にして沓反に六斗を施す。是ハ麦の畦の中にておく也。人糞ハ悪敷とて置かざる也。是を一番肥と云。○又五月節より中迄のうち、又々油粕の粉を六斗ばかり置也。是を二番肥といふ。○半夏生前後に、又々粕の粉六斗より九斗も入る也。是を三番肥といふ也。○六月土用入時分培時又々かい込肥とて、六斗ばかりも置也。大方油粕にて仕上、人糞・干鰯ハ余り用ひず。

○修理(作の仕方、手入を大和の仕様ハ、堅ざんに立ざんとは、畦の通りに種を蒔くことをいう、後出注ハ横ざんと対照の語)蒔いたら、麦の中で一度中耕する。○麦を刈つて後に「一番けづり」とも「株がえし」ともいって、株を起し、削つて、麦

○蒔く時期は、田につくるばあい、八十八夜の四、五日前から始めて八十八夜の四、五日後まで蒔く。畑は、八十八夜から四、五日後に蒔く。

○種は、一貫二百目相当を見計らつて蒔く。

○肥はめぐら粕といつて、蒔いてから芽の出ないうちに、油粕を粉にして一反に六斗を施す。これは麦の畦の中に入れておく。人糞はよくないとして用いない。これを一番肥という。○また五月のはじめから中ごろまでのうちに、ふたたび油粕の粉を六斗ほど置く。これを二番肥という。○半夏生前後に、さらに油粕の粉を六斗から九斗ほど入れる。これを三番肥という。○六月土用入りごろの土寄せのとき、「かい込肥」といつてもう一度油粕を六斗ほど置いておく。ほとんど油粕で仕上げ、人糞・干鰯はあまり用いない。

○修理(作の仕方、手入を大和では修理という)の方法は、堅ざんに(立ざんとは、畦の通りに種を蒔くことをいう、後出注ハ横ざんと対照の語)蒔いたら、麦の中で一度中耕する。○麦を刈つて後に「一番けづり」とも「株がえし」ともいって、株を起し、削つて、麦

づゝに切て、根に置なり。是ハ雨ふりても、土のはしりあがらぬ用心也。○半夏生時分、粕を置て又々けづる也。是を二番けづりといふ。此時も後に根に麦から又葉など一寸斗に切ておく也。是ハ土のとばしりかゝらぬ用心也。○土用入前後に大培とて、根に土を寄るなり。○土用入三日まへより末を留る也。尤其年生立の様子ニよりに遅速あり。○大和国ハ都て横ざんに蒔なり。畦幅四尺五寸より五尺或ハ六尺にもする所あり。ずん間筋を云也。尙尺七八寸より三尺、又武尺二三寸位なり。○土用入四五日又ハ十日目より、花ハ咲初る也。此時雨天統かば不作なり。花咲初て五十日斗たてべ、綿吹初る也。○種をとる事ハ、木の下肢に付たる早ぶきの綿にてたねをとりてまけべ、自然と吹方はやし。然れども核子大きくなりて、操粉すくなし。中枝より末のわたを種子にとれば、ふき出し遅けれども、くり粉多し。

稈を一寸ほどずつに切つて根元に置くのである。これは雨が降つても、土がはね上らないための用心である。○半夏生のころ、油粕を置いてまた削る。これを二番削りという。このときにも、削つた跡の根元に麦から葉などを一寸ほどに切つて置く。これは、土が飛び散らないための用心である。○土用入りの前後に「大培」といって、根に土を寄せる。○土用入り三日前から、最終の芯を留める。もつともその年の生育の具合によつて遅速はある。○大和国はすべて横ざんにまく。畦幅四尺五寸から五尺、あるいは六尺にするところもある。蒔き筋の間(ずん間)ずんとは筋をいう)は一尺七、八寸から二尺、また二尺二、三寸くらいである。○土用入りの四、五日後、十日目から花は咲き始める。○種を取るにつれて、木の下肢に付いた早吹き綿から種を取つて蒔けば、自然と吹き方は早い。しかし種実が大きくなつて、繰り粉は少ない。中枝から上の綿を種とすると、吹き出しは遅いが繰り粉は多い。

○此所にて作るハ〇てつばう〇黄花〇ちんこ
〇猿の耳〇権九郎〇八メ〇おごろ等なり。

○同国の国中と唱ふるハ、四方ハ山にて、中
ハ至て広くたいらかなる所故、国の真中といへ
る心にて、斯いふなるべし。此廻りの山に添て
酉の方ハ竹の内村・当麻寺、戌亥の方につゞき
てハ龍田・法隆寺、子丑の方ハ郡山・奈良、寅
卯の方ハ石上・在原寺・布留社・柿本寺・丹波
市・三輪につゞき、辰巳の方ハ多武峯・高取、
午未申の方ハ戸毛・御所・新庄也。そのめぐり
の中ハ一面にたいらかにて、東西五里、南北十
里程の間、土よく肥、大小の村々散在せり。此
国中より宝曆の時分にハ凡四万駄、惣本を九貫三百
駄と作出せしが、今ハ減じたりとぞ。尤此所
にてハ土地によりて綿直段大いに高下あり。竹
内村と法隆寺と道のり式里程の間にあたりて、
今市・今井・疋田村といへる凡高三千石程ハ、
式百四拾目を壹斤として、百斤ニ付外の村々よ

〇ここてつくつてゐる品種は、「てつばう」「黄花」「ちんこ」「猿の耳」
「権九郎」「八貫」「おごろ」などである。

○大和の国中というのは、四方が山で中心部は大変広く平坦であるた
めに、国の真中という意味でこのようにいうのである。この周囲を廻つて
いる山に添つて、酉の方向を竹の内村・当麻寺、戌亥の方向に続いて龍
田・法隆寺、子丑の方向は郡山・奈良、寅卯の方向は石上・在原寺・布
留社・柿本寺・丹波市・三輪に続いて、辰巳の方向は多武峯・高取、午
未申の方向は戸尾・御所・新庄である。それらの山々のかこんでいる中
は一面が平らで、東西五里、南北十里ほどの間は、土が肥沃で大小の村
々が散在している。この国中で宝曆ころには約四万駄（一本は九貫三百
目入り、三本を一駄という）をつくり出していたが、現在では減つたよ
うである。もつともここでは、土地によつて綿の値段が大変高低がある。
竹内村と法隆寺とは二里ほどの道のりで、今市・今井・疋田村という約
三千石高ほどの地域は、二百四十目を一斤として百斤につき他村より約
五、六十目ほど直段が高い。同じ国、同じ真土でもこのように値段の高
低がある。だから土地に相応・不相応を熟考してつくることである。一
般的に大和国では、十年間ならして田畑とも一反から二百斤ほど取ると
いう。盆地内の気候は、摂津の国より寒く京都と似ているが、少し暖か
である。吉野郡・早多郡は京都より寒い。左に記すのは、広瀬郡・式下
郡・奈良・郡山・箸尾・俵本・丹波市・今井・八木・高田付近のつくり

方である。

り凡銀五六拾目程直段高直なり。同じ国・同じ
真土にても、如此直段の高下あり。依て土地
に相応・不相応を考へためて作るべき事也。
惣て大和国ハ十ヶ年ならし、田畑とも一年壹反
に式百斤位とるといへり。此国中の気候ハ撰
津国より寒く、京都に相似たれども、少し暖な
るかたなるべし。吉野郡・宇多郡ハ又京都より
寒し。左に記ハ、広瀬郡・式下郡、奈良・郡山
・箸尾・俵本・丹波市・今井・八木・高田辺の
作りかたなり。

○先年ハ八十八夜ハ土の中とて、十日程も前
より蒔たれども、今ハ奈良辺ハ専ら八十八夜よ
り十日ほどおくれ蒔也。

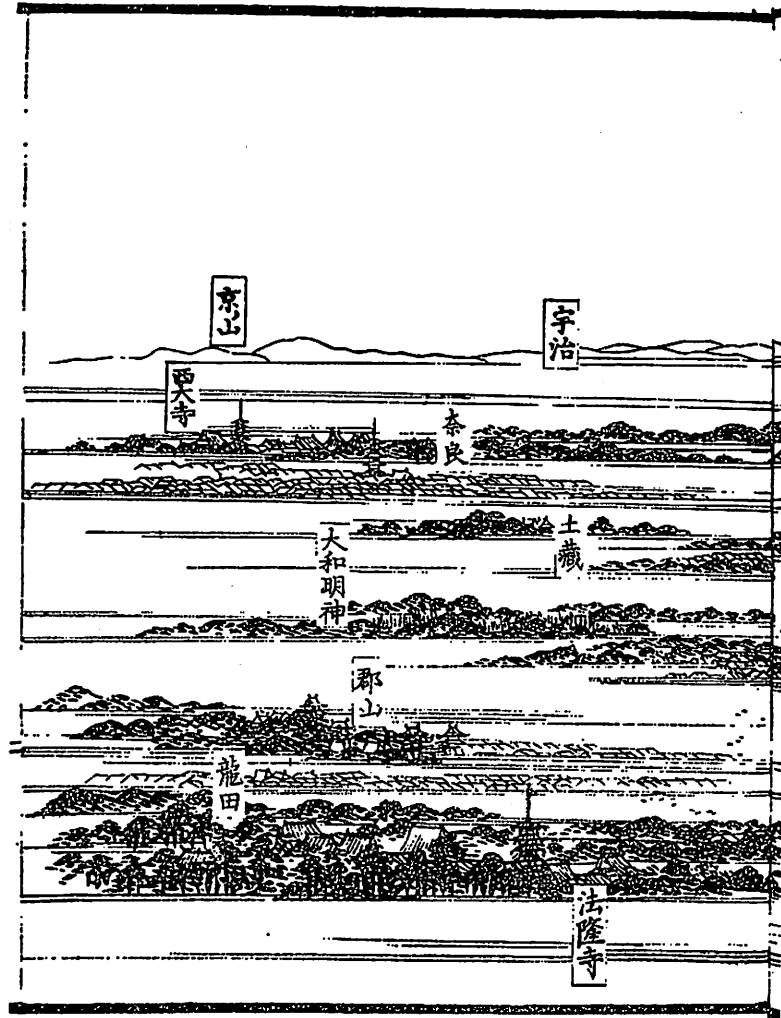
○蒔種ハ多く小便に浸し、薬の灰をまぶして
まくなり。尤竹を焼たる灰まじりてハ、生る
事なしとて、灰を撰てまぶして蒔事なり。

○蒔おくれ蒔種子を蒔るすにハ、麦にても菜
種子にても、刈たる株を其備置、其株際に蒔て、

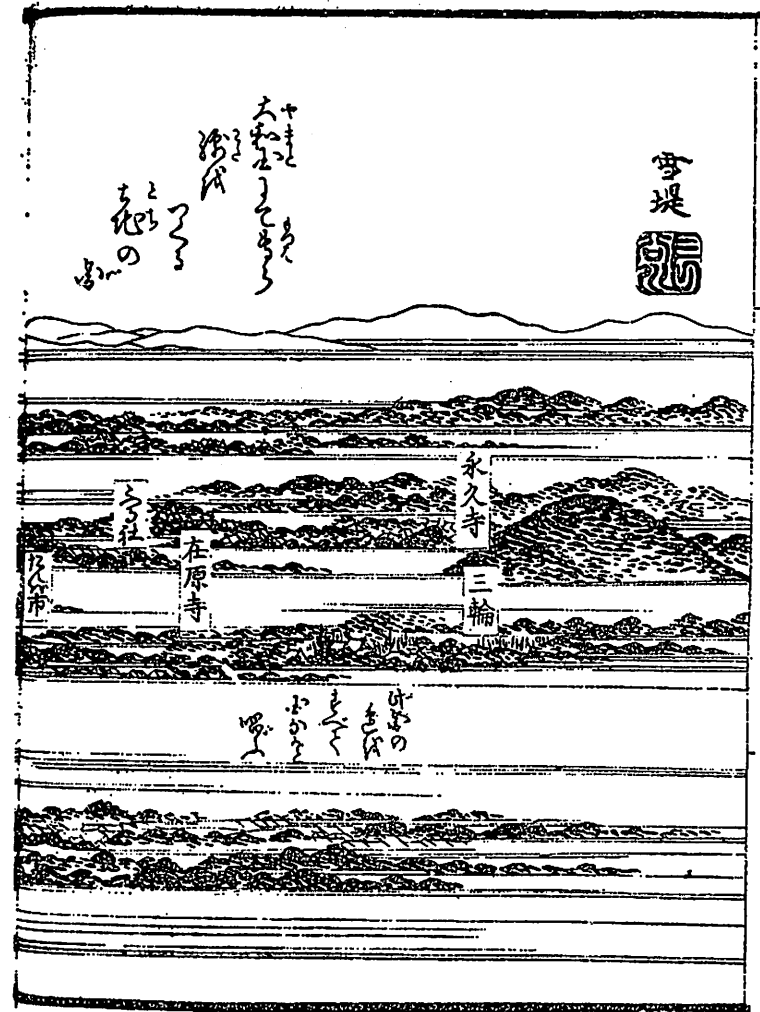
○近ごろまでは、八十八夜は土の中といつて、十日ほど前から蒔い
たのだが、現在では奈良付近はもっぱら八十八夜より十日ほど遅れて蒔
く。

○種は、たいいてい小便に浸して薬灰をまぶしてから蒔く。もつとも竹
を焼いた灰が混ると発芽しないといつて、灰を選んでまぶして蒔くの
である。

○蒔き遅れて種を蒔くときは、麦であっても菜種であっても、刈り株
をそのまま置いてその株際に蒔いてからその株を掘り起こす。



宇治
京ノ山
奈良
西大寺
土蔵
大和明神
郡山
龍田
法隆寺



雪堤
大和國にて専ら織
をつくる土地の図
永久寺
三輪
在原寺
ふる社
たんバ市
此図の辺をすべて
国なかと唱ふ

其後株を起すなり。

○一番肥ハ、はえざる先に、油粕の粉を其時
たる際より間四寸程置て、棒の穴つきにて穴を
明、其あなの中に入れて施す也。時旬はやきと覚
ゆる時ハ、生摘ひたる時分施す也。

○二番肥ハ半夏生前、又油粕か干粕
を施すなり。

○畦をこしらふるハ、俵本辺ハ立さん、郡山
辺にてハ横さんがいへり、砂真土ハ多く横さんに
つくる也。

○土性の事、國中ハ真土がち也。

○國中にて作る所の種類ハ○権九郎をおもに
つくり、郡山辺ハ○耳綿を多くつくる也。

○こやしハ土用におくれてハ、肥の気残りて
綿のふき方わるしとて、多く二番肥迄に余分に
おき、三番を施さざるもあり。又三番肥まで入
るもあり。其間に水肥ハ見合入る也。

○土を寄せる事ハ小寄とて、半夏前によするな

○一番肥は油粕の粉で、発芽する前に蒔いた種の際から四寸ほど間隔
を置いて、棒で穴をあけ、その穴の中に入れるのである。蒔く時期が早
いと思うときは、生えそろうたころに肥をやる。

○二番肥は半夏生前で、油粕か干粕(しょうちゅうのかす)をやる。

○畦のつくり方は、俵本付近では立さん、郡山付近では横さん(がん
ぎともいう)で、砂真土の土地では多い横さんにつくる。

○土質は、國中は真土が多い。

○大和の國中でつくる品種は「権九郎」が中心で、郡山付近では「耳
綿」を多くつくる。

○施肥が土用より遅れると、肥の気が残って綿の吹き方が悪いので、
多くのばあい、二番肥までに余分に施し、三番肥をやらぬこともある。
しかし、三番肥までやることもある。その間に水肥は、見計らって入れ
る。

○土を寄せるには、「小寄せ」といって半夏前に寄せる。もっとも時

り。尤遅れたる時ハ、肥を施す前にもよする
也。○二番寄ハ土用差入迄にする也。

○末の芯を留る事ハ河内國に同じ。

○俵本辺にて綿を取事ハ、沓反に十年ならし、
沓年に百三四十斤取収るよし。尤沓斤貳百五拾
目斤也。然れども所によりて少々宛多少あり。

○種綿を取にハ、四房にふきたる綿をよりに
とり、たねにすれバ、八九歩通りハ四房のわた
ふくとて、斯する者あり。綿をつくる人ハ如此
心を用ひたきもの也。

○大和國の綿、他國にてハ多く衾・衣
類などの中入に用ひ、糸口にする事少く、糸口
ハ多く河内綿・撰津綿を用ふ。是ハ其土地によ
る事と見えたり。尤大和國にてハ専ら糸にひ
き、木綿を織なり。されどもいかなる事にか、
河内・撰津ほどにはつよからず。

き遅れたときは、肥料をやる前にも寄せる。○二番寄せは、土用入りま
でにする。

○末の芯を止めるのは、河内の國と同じである。

○俵本付近の綿の収量は、一反につき、十年間ならして一年で百三、
四十斤である。もっとも一斤は二百五十目斤である。しかし、所によっ
て少しずつ違っている。

○種綿を取るには、四房に吹いた綿を選び取り種にすると、八、九分
通りは四房の綿が吹くといひ、このようにしている者がある。綿をつく
る人は、このような心構えを持ちたいものである。

○大和國の綿は、他國では衾(ふとん)・衣類などの中入れに用いるこ
とが多く、糸取り用には少ない。糸取りには、たいいて河内綿・
撰津綿を使う。これは、その土地によるためであらう。もっとも大和で
は、もっぱら糸にひいて木綿を織る。しかしどうしたわけか、河内・撰
津ほどは強くないのである。

- (1) 宇智郡 現奈良県五条市。
- (2) 御所 「こせ」と読む。
- (3) めくら粕 発芽前に油粕を施肥する。
- (4) かい込肥 掻い込肥、土寄の折に土を掻いて肥料を埋め込む。
- (5) けじる 中打・中耕のこと。
- (6) 麦壳 麦殼の誤まりであらう。

う。(7)大培 培土(土寄せ)を大掛りにする。(8)横ざん 縦(豎、立)ざんに対していう。前作の麦の筋の方向と直
角に筋を切つて播種すること。(9)広瀬郡 現北葛城郡の一部。(10)式下郡 現磯城郡の一部。(11)糸口 糸取用。

河内国綿作りやう

河内国若江郡・八尾・平野辺ハ其国の中程に
て、大坂をはなる事二三里程東に当れり。土
地ハ砂真土にして、所々にしめ土とて、下にハ
堅き土あり。平野二里東 辺ハ、是も砂真土に
して、所々左程の深田にあらざれども、泥が
ちの湿氣の田ありて、半田奥の田と号して、
盤に香を盛たるがごとく、沓畦ハ田、沓畦ハ畑
にして、土をかき揚たる方に綿を作り、低き方
に稻を作るを、播揚田ともいひて、其田の処に
水溜れども、畑ハよく乾き、殊に田土を揚たる
ものなれば土肥で、外の肥し半分入て綿よく出
来、水田の稻も一段見事に出来たり。

擬此国の西北ハ摂津国、南は和泉、東ハ大和

河内国でのつくり方

河内国若江郡・八尾・平野付近は、河内国の中ほどにあり、大阪から
二、三里ほど東にある。土地は砂壤土で、所どころに締め土といって、
下に堅い土がある。平野(大阪から二里東)あたりは、こども砂壤土で
所どころにさほどの深田ではないが、泥の多い湿田がある。これを半田
(半田の奥にある)と称して(盤)に香を盛つたように、一畦は田、
一畦は畑で、土をかきあげた方に綿を作り、低い方に稻を作ること
「播揚田」ともいって、その田の部分に水は溜り、畑はよく乾燥するの
である。とくに田の土をかきあげたものなので、土も肥えて外の肥料は
半分入ただけで綿が良くでき、水田の稻もいっそうみごとくできる。

さてこの国の西北は摂津国、南は和泉、東は大和・山城と多くの国と

・山城と国々にとり、南北西ともに山なく、
東の方のミに屏風を立てたる如き山あり。其山と
いへるは金剛山・葛城山、夫に統て篠尾・二上
・志貴山・生駒山并ニ 暗峠などいへる名高き
山々あり。うちひらきたる所にして、氣候ハ摂
津に相似て、京都よりハ暖和也。東の山に近き
所ハ黒真土あり、はらつきたる黄土あり。水ハ
川々ありて十横に流れ、水に乏しからず。殊に
少しも野地なく、田畑のミなれば、農家各作
りものに心を尽し務る事故、国内にて作る処の
操綿凡五六万駄にて、木綿を織て諸国へ売出す
事又夥し。丈夫なるに依て河内木綿とて、何國
にても重宝する也。又河内・大和・和泉の國に
てハ、糸をつむぐに女にかぎらず男も四五十歳
より上の老人ハ、内に居て多く糸をつむぐ也。
夫ハ糸太くして織たる処の木綿丈夫なり。尤女
のつむぎたる細口の上木綿も出来る也。斯うつ
くしくできて、もとより綿の性よろしければ、

隣接し、南北西ともに山はなく、東の方だけに屏風を立てたような山が
ある。その山というのは金剛山・葛城山、それに統て篠尾・二上・志
貴山・生駒山並びに暗峠などという有名な山々がある。平坦地で、氣候
は摂津とよく似ており、京都よりも暖かである。東の山に近いところは
黒壤土で、ばらついた黄土である。水は川が多く、縦横に流れ豊富であ
る。にもかかわらず野地は少しもなくて、田畑だけであるので農家では
各作物に専心する。そのため河内の国内でつくる繰綿は約五、六万駄で、
木綿を織つて諸国へ売ることが盛んである。丈夫であるために、河内木
綿といつてこの国でも重宝されている。また河内・大和・和泉の國で
は、糸を紡ぐのは決して女に限らず、男でも四、五十歳から上の老人は
家において多くの糸を紡ぐ。男の紡いだものは、糸が太く織りあがつた木
綿が丈夫である。もつとも女が紡ぐ細口の上木綿もできる。このように
美しくできて、綿の性がよいため、やはり丈夫である。だから河内國
の名産品となっている。